

洲本城の歴史年表

永正・大永年間	安宅氏が洲本城を築城
1576年(天正4年)	織田信長が安土城を築城。
1581年(天正9年)	羽柴(後の豊臣)秀吉が淡路を平定
1582年(天正10年)	本能寺の変 賤ヶ岳の戦い 羽柴秀吉が仙石秀久に洲本城を与える。
1585年(天正13年)	仙石秀久が讃岐高松城主になり、 脇坂安治が洲本城主となる。
1587年(天正15年)	脇坂安治、九州攻めに参加
1590年(天正18年)	脇坂安治、小田原攻めに参加 豊臣秀吉が天下統一する。
1592年~1598年	文禄・慶長の役(朝鮮出兵)
1592年(文禄元年)	脇坂安治は、朝鮮出兵に水軍の将として参加
1596年(慶長元年)	慶長伏見地震で、洲本城が被害を受ける。
1597年(慶長2年)	脇坂安治は、再び朝鮮へ出兵する。
1598年(慶長3年)	豊臣秀吉が病死。 日本軍は朝鮮半島より撤退する。
1600年(慶長5年)	関ヶ原の戦い 脇坂安治は、西軍として出陣し、途中東軍へ 移り、東軍の勝利に貢献する。
1603年(慶長8年)	江戸幕府の成立
1609年(慶長14年)	脇坂安治は、伊予大洲へ移封。洲本城は藤堂 高虎の預りとなる。
1613年(慶長18年)	池田忠雄が淡路国を領有するが忠雄は 由良城を新築し、洲本城へは入らず。
1614年(慶長19年)	11月、大坂冬の陣
1615年(元和元年)	5月、大坂夏の陣。豊臣氏 滅亡 池田忠雄は、備前岡山へ転封。阿波徳島 城主の蜂須賀至鎮が淡路国を加増される。
1631年(寛永8年)	蜂須賀氏は、拠点を由良から洲本へ移す (由良引け) 徳島藩の家老・稲田示植が洲本城代となる。
1929年(昭和4年)	三熊山上に模倣天守を建築
1995年(平成7年)	兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)
1999年(平成11年)	国の史跡に指定
2017年(平成29年)	続日本100名城に認定される

洲本城のあらまし

三熊山に初めて城が築かれたのは室町時代の後期で、紀州熊野水軍出身の安宅氏が土塁や柵等で造った「土の城」であったと考えられています。「本能寺の変」後の1582年(天正10年)、羽柴(後の豊臣)秀吉配下の武将仙石秀久が城主となり、四国攻めの前進基地・水軍の城として増改築が始められました。1585年(天正13年)には、同じく秀吉配下の武将の脇坂安治が城主となり、文禄・慶長の役(朝鮮出兵)の時期を含む、1609年(慶長14年)までの24年間の在城中、現在見られる洲本城が築かれ、大坂城や大阪湾、紀淡海峡を防衛する大坂城の出城としての役割を担いました。脇坂安治は朝鮮出兵の際の倭城築城の経験を活かし、山上と山麓部との間を東西二条の「登り石垣」で連結したより強固な城を築きました。

このような洲本城の歴史や、天正・文禄・慶長の各時代の石垣・石積みの変遷が見られる等の貴重な価値が認められ、1999年(平成11年)に国の史跡に指定されました。

《DATA》

所在地：兵庫県洲本市小路谷(三熊山)
入場料：無料(天守閣へは入場できません)
時 間：自由
問合せ：0799-25-5820
(洲本観光案内所 9:00~17:00)

アクセス：

徒歩 洲本バスセンターより徒歩約40分
マイカー 淡路島中央スマートIC・
洲本ICより約30分



瀬戸内海国立公園

国指定
史跡

洲本城跡



標高133mの三熊山の山頂部に築かれた洲本城は、東西約800m・南北約600m・広さ278.5㎡に及び広大堅固な縄張りを持っています。天守閣等の建物は現存していませんが、縄張りや石垣等が戦国時代の城郭様式をよく残しており、保存状態も良好であることから、1999年(平成11年)1月に国の史跡に指定されました。

発行



一般社団法人
淡路島観光協会
Awajishima Tourist Association

<https://www.awajishima-kanko.jp>

2023年1月発行

わきさか(ざか)やすはる
洲本城主 脇坂 安治

現在見られる洲本城を築いた洲本城主 脇坂安治は、近江国浅井郡の生まれで、1569年(永禄12年)、16歳で羽柴(後の豊臣)秀吉に仕えました。1583年(天正11年)の賤ヶ岳の戦いでは、福島正則や加藤清正らと共に活躍し「賤ヶ岳の七本槍」の1人に数えられました。

小牧・長久手の戦いの功績により1585年(天正13年)10月に淡路国3万石を与えられ、以降、24年間、洲本城主として現在見られる洲本城の築城を進めました。また、洲本城主となってからは水軍の将として、九州征伐、小田原征伐や朝鮮出兵などに陣出し活躍しました。

豊臣秀吉の死後は、1600年(慶長5年)の関ヶ原の合戦で、始めは西軍についていましたが、途中東軍に移り、所領は安堵されました。

1609年(慶長14年)、伊予大洲に加増移封され、家督を安元に譲った後は、京都西洞院に住み、1626年(寛永3年)に京都で死去(享年73歳)しました。播磨龍野 脇坂家初代。



たつの市立龍野歴史文化資料館所蔵

歴代の洲本城主・城代等の家紋

						
まるにやはし	はちすかまんじ	あげはちよう	とうとうとび	わちがい	えいらくせん	さんかいびしくぎぬぎ
稲田氏 いなだ	蜂須賀氏 はちすか	池田氏 いけだ	藤堂氏 とうどう	脇坂氏 わきさか(ざか)	仙石氏 せんごく	安宅氏 あたぎ
交通の便が悪いなどの理由から、由良城を廃し、再び洲本に拠点を移す。城下町丸ごとの大移転であり、「由良引け」と呼ばれている。	・一六一五年慶長二〇年、大坂夏の陣の後、阿波徳島城主蜂須賀至鎮に淡路一国が加増され、家老の稲田氏が由良城代となる。	・一六一〇年慶長一五年、姫路城の池田輝政の三男忠雄が領主となった際に、洲本城は廃城となる。 ・忠雄は、岩屋城、由良城を城築し、豊臣方大名の動きをけん制、大坂城の包囲体制を確立した。	・一六〇九年慶長 四年、洲本城は、藤堂高虎が幕府より預かりとなり、城代を置いた。	・一五八五年(天正 三年)脇坂安治が洲本城の城主となり、天守が造営されるとともに、石垣の大改修が行われた。 ・朝鮮出兵の際の倭城での経験等から「登り石垣」が築かれる。	・淡路討伐の後、淡路の各城は仙石秀久の支配下に入り、洲本城は、四国攻めの水軍の城として石垣の城を築きはじめる。	・永正・大永年間(一五〇四〜一五八)三熊山に洲本城を築城。 ・一五八一年(天正九年)の淡路討伐の際に降伏。

三熊山・洲本城のみどころ

あろう
穴太積み

近江国穴太の石工たちの石垣の積み方で、洲本城では、本丸台・天守台に、慶長時代の穴太積みが見られます。割石を横位置に積み、いくつかの石で横目地が通るよう組まれています。



洲本八景1「大浜を大観」

洲本城は水軍の城として築かれたもので、山上からの眺望が良く、城下も一望できます。脇坂安治も洲本城に入ると、大坂城の防衛等のために水軍を編成し、大阪湾を制しました。



しば えもん だぬき
柴右衛門狸

昔々、洲本の三熊山に柴右衛門狸という芝居好きの狸が住んでいました。毎日のように人間に化け、木の葉を化かしたお金で大阪道頓堀の中座まで芝居見物に出かけていました。そんなある日、とうとう変身がバレ犬に捕まってしまいました。いつまで待っても帰ってこない柴右衛門を思う洲本の人は祠を建ててお祀りすることにしました。今もなお、洲本や大阪中座では「芝居の神様」として大切にされています。



しのぎずみ
鎬角

通常、石垣の角は普通90度ですが、鎬角は鈍角に築かれています。山城では地形に合わせて曲輪を築くので、鎬角が多く用いられます。



洲本八景2「マリーナを展望」

馬屋から見られる紀淡海峡の眺望が良く、海峡の左側が和歌山県の友が島、右側は由良です。馬屋の先端部に自然石が数個、一列に並び、祭祀的な場所であったと思われます。



シロミノヤブムラサキ

クマツツラ科
 学名：Callicarpa mollis Sieb. et Zucc. forma albifructa Nanko et Fukuoka
 1992年12月22日、三熊山で発見された世界唯一の木で洲本市の天然記念物。普通のヤブムラサキとの違いは、若い枝が緑色で、花も実も白いこと。花は6月上旬に開花し、実は11月ごろに白く熟します。



1 おお て もん あと 大手門跡



城の表門。現在の大手口(門)は、関ヶ原の合戦以降に作られたと思われ、紀淡海峡に向かって

2 こし くる わ に だん つ いし が き 腰曲輪(二段積みの石垣)



低い石垣が二段に築かれており、高く見せようとしたことが伺えます。石垣を二段に積むのは初期の頃であると思われます。

3 うま や 馬屋(月見台)



先端部が一段高くなっており、東西に数個の自然石が並んでいて、中には刻字のある石があることから、何かの祭りの場所であったかも知れません。

洲本城縄張図

作図:山本幸夫



4 み な み まる す み やぐら あと 南の丸 隅櫓跡



文禄・慶長初期の石垣。南東の隅角部に、先に築いた石垣に、本丸の防衛を強固にするため、増築したあとが、二重の稜線となって見られます。

5 じつげつ い ど 日月の井戸



井戸の底の岩盤に日月の彫り物があると言われています。井戸の水は、城中の日常用水と、籠城戦に備えられました。

6 じつげつ い け 日月の池



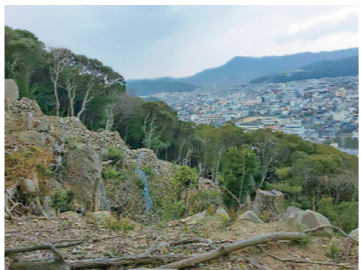
谷池の湧き水を池にし、近くに日月の井戸もあるため水が枯れる事はなく、日常用水と籠城戦に備えられました。現在は、庭園風に改造されています。

7 はち おう し き ど 八王子 木戸



山麓から最短距離で通じる虎口。虎口に入る手前に八王子神社があるので、八王子木戸と呼ばれています。

8 ひがし のぼ いし が き 東の登り石垣



洲本城主脇坂安治は、朝鮮の役で築いた城(倭城)で用いた海岸部と山上の城を石垣で連結する技術・工法を洲本城に導入したものと考えられます。登り石垣は、彦根城や松山城、米子城などでも見られるが、洲本城独特の構築です。

9 ひがし まる 東の丸



多数の曲輪からなっており、北側の2段になった方形の曲輪と、南側の用水池(日月の池)が特徴。洲本城が籠城戦になったときの重要な曲輪でした。 ※足元注意



洲本城の本丸復元図 / 作図:吉田順一

10 ひがし に もん 東二の門



東の丸の東に面して海へ構える、高く長い石垣は、南の谷まで延びる最前線の石垣です。東二の門は、その中間にある重要な虎口で、この虎口を入ると大石段まで直進になります。

11 ひがし まる に だん くる わ 東の丸 二段の曲輪



方形の曲輪が二段に造られており、小高い丘の上に低い石垣をめぐらして築かれた特異な構造です。紀淡海峡・大阪湾が広く眺望でき、海上の監視・水軍への狼煙など通信指令所であったと思われます。 ※足元注意

12 ひがし まる たか いし が き 東の丸 高石垣



文禄・慶長初期の石垣で、本丸を守る最前線の高い石垣。隅角は、大きい野面石を交互に積む算木積みですが未完成。築石も野面石で横目の通らない乱積みで、間詰石が多く目につきます。 ※足元注意

13 む しや だま り 武者溜



洲本城の最も東の曲輪で、城兵を待機させる広い曲輪でした。曲輪の周囲は低い石垣が築かれ、竊角も多く見られます。

14 ひがし いち もん 東一の門



山麓から洲本城内へ通じる虎口であり、由良道とも結ばれる重要な虎口です。

15 み な み まる 南の丸



本丸の南側にあって、現在の搦手口や本丸虎口を守備しています。城の南側を見通し本丸を守る重要な曲輪です。

16 ほん まる おお いし だん 本丸大石段



広い石段は、洲本城の威風を示しています。この石段を上ると本丸虎口があり、本丸へと通じています。関ヶ原の合戦以降の構築と思われる、大石段が造られたとき、大手口(門)が開かれて通じるようにしたのもと思われます。

17 ほん まる こ ぐ ち 本丸虎口



敵勢の本丸への直進をはばむため、屈曲した内枳形を構成しています。頑丈な門の柱を受けた礎石が残されています。

18 ほん まる 本丸



本丸の南側と西側は、低い馬踏み石垣。東側は高い石垣の頂上部。北側には大天守台と小天守台が築かれ、その間を石垣が接続して本丸が形成されます。西北と南には虎口が設けられ、本丸を守っています。

19 ほん まる てん しゆ だい 本丸天守台



大天守と小天守の間をつなぎ櫓で結ばれた連結式天守の構造をしていました。現在の天守は、1929年(昭和4年)に建造されたもので、往時の天守を復元したものではありませんが模擬天守としては日本最古のものです。(現在、模擬天守内には入れません)

20 ほん まる から め て こ ぐ ち 本丸搦手虎口



搦手からの敵勢は、この内枳形虎口で防ぎます。南の本丸虎口と同様に、堅固な門の礎石が二個対応して見られます。

21 から め て こ ぐ ち 搦手口



城の裏門にあたる搦手口と言われていますが、洲本城の初めの頃は、現在の大手口(門)ではなく、ここが山麓から登城する大手口(門)であったと考えられています。

22 もみ ぐら 糶蔵



米や麦、その他 食糧の蔵が建っていたところで、食糧などは山麓から、今の搦手口を通して蔵に納められたと思われます。

23 ざん わん いし 残念石



石材を取るために、石に矢穴を掘り、クサビを入れて打ち込んで割ります。矢穴を掘ったままで石材とならずに放置された石は残念石と呼ばれています。

24 にし まる 西の丸



本丸から離れた独立の出城で、西の丸の南側には慶長時代の石垣がめぐります。西の丸では瓦が見つからないので建物はなかったと思われます。

25 にし のぼ いし が き 西の登り石垣



山麓の居城から山上の城を結ぶ階段状に築かれた登り石垣は、洲本城独特の構築です。急峻な山腹で石垣の崩れもあるので、近づくのは危険です。